

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 工学部・工学研究院

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 「研究成果の状況」

本研究院では、独創的研究、学際的研究ならびに社会的要請の高い研究を展開するとともに、横断的学際研究を積極的に推進している。そのため、各部門では基礎と応用の有機的連携を図り、特色ある基盤的研究および新たな視点・手法を取り入れた先駆的研究を行っている。また、大型プロジェクト研究、産学官連携研究、地域連携研究等に積極的に参画し、技術の向上、産業の振興、地域・社会発展に貢献する活動を行っている。これらの研究の成果は、代表的論文の受賞状況や社会貢献活動に反映されている。

平成 20～21 年度の卓抜した水準にあるとして選定した業績の中で、論文賞などを受賞した論文は 28 件であった。このうち、研究業績の受賞として特筆すべきものは、将来のノーベル賞候補者になるような若手研究者（45 歳未満）を顕彰する第 5 回日本学術振興会賞（平成 20 年度 小江誠司）や 40 歳未満の若手研究者を対象とした平成 20 年度文部科学大臣表彰 若手科学者賞（松浦和則、田中敬二）の受賞がある。

大型研究プロジェクトでは、内閣府 最先端研究開発支援プログラムに「スーパー有機 EL デバイスとその革新的材料への挑戦」（平成 21 年度～ 研究代表者 安達千波矢）が、文部科学省 地球観測衛星開発費補助金に「地球観測などに用いる超小型汎用人工衛星システムの開発」（平成 21 年度～ 研究代表者 麻生茂）が採択された。そのほか、平成 21 年度文部科学省都市エリア産学官連携促進事業、(独) 科学技術振興機構 重点地域研究開発推進プログラム、NEDO 提案公募型開発支援研究協力事業などの産学官連携研究や地域連携研究が新たに進められている。さらに、日本学術振興会のクリーンエネルギーシステムに関する国際活動に携わる若手研究者育成プログラムに採択されるなど、国際化に向けた取り組みも行われている。

一方、様々な国際活動を推進するために、平成 22 年 4 月に向けて工学系国際交流支援室の設置が進められた。また、アジアを代表する世界的研究・教育拠点大学としての機能を強化することを目的に国際化拠点整備事業（グローバル 30）による外国人教員が採用された。さらに、女性研究者プログラムによる女性教員が採用され、組織の充実が行われた。

これらの業績は、21 世紀 COE プログラムやグローバル COE プログラムなどの成果として世界をリードする教育研究拠点の形成が着実に進んでいることを示している。

このように平成 20～21 年度の研究成果の状況は、これまでの水準を大きく上回る結果が得られている。